

長谷川 望牧師

*使徒のヨハネは、イエスが神の子であり、救い主キリストであることを多くの「しるし」(証拠)をもって証明してきた。ラザロの復活はユダヤ人たちに衝撃を与え、十字架の決定的な原因になった。この「しるし」によって多くの人がイエスを信じたが、信じないでかえって反感を持つ者もいた。彼らは、パリサイ人や祭司長たちのところへ行き、事の次第を告げた。臨時の最高法院(議会)が召集され、審議をすることになった。「**あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。**」(ヨハネ11:48) 民衆がみなイエスのところに行ってしまうと、矛先は特権階級に向けられ、暴動に発展する可能性がある。そうなると、今まで政治、経済、宗教に寛容な政策をとっていたローマは態度を一変させ、ユダヤを滅ぼしにかかるだろう。そこで、大祭司カヤパは一つの提案をする。「**あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。**」(11:49~50) このイエスを亡き者にしてしまえば、面倒なことにならない。単純なことではないか、という。

*しかし、福音記者ヨハネは、このカヤパが言ったことばには裏の真理があるという。「**イエスが国民のために死のうとしておられること、また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。**」(11:51~52) カヤパは、自分の心の内を語ったのであるが、実は無意識のうちに神の言葉を語り、これから起こることを預言したのだという。神は時に、神を知らない人をさえ用いてご自分のみこころを現わされることがある。

*そのみこころ、真理とはイエスの十字架である。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。**」(ヨハネ12:24) イエス・キリストが十字架にかかって死ぬことがなければ、私たちのいのちはなかった。主の死によって私たちは生きる。罪ゆえに散らされていた世界中の人々が、主イエスの十字架とよみがえりによって主のもとに集められるのである。